

視覚化シート作成の経緯 発症 急性期 回復期 社会的リハ 社会復帰

高次脳機能障害は、障害像が多様で個性が高く、社会的背景も考慮すると、オーダーメイドの支援が必要になることが多いです。しかし、それにはまず標準的な支援が確立されていることが大切です。千葉リハでは、回復期リハ病棟における高次脳支援を整理した視覚化シートを作成しました。シートは、左から右に向かって時間が進み、各時期に検討すべき支援を項目ごとに整理しました。復学や地域生活への復帰など**目標別に4シート**ありますが、**今回は就労を目指すシート**に沿って、入院中の支援のポイントを紹介します。

1 職業準備性ピラミッドを意識した自己管理のポイント

ポイント
働くための土台「職業準備性」



中島ソシヤルワーカー

職業準備性の土台にあたる病識・健康管理、生活リズム・疲労コントロール・スケジュール管理・移動方法等の生活管理、対人技能をシートに位置づけることで、入院中から提案できるアプローチを明確にし、実践します。職業準備性は、障害の支援や受け入れ環境との相互関係の中で見ていく必要があります。職業生活の継続のために、本人が努力すべきこと、企業が配慮すべきこと、支援者が支援すべきことを整理するための視点として捉えることが大切です。



2 他者とのコミュニケーション

ポイント
職場にふさわしいコミュニケーションのために

他者とのコミュニケーション
(気になる項目があればチェック → 多職種で対応方法の検討・統一)
【対象】慣れた相手 □ 慣れない相手 □ 特定の他者 □ 集団での交流
【表出】□ 攻撃性 □ 冗言 □ 社会人としての対応
【理解】□ 聞き流らし □ 内容の混乱、変容 □ 独自の解釈



失語症、注意障害、記憶障害、脱抑制などの症状がある方は、対人コミュニケーションについて以下のような問題が生じる場合があります。
【対象】慣れた相手や特定の相手は得意だが、慣れない相手や集団での交流の場でのコミュニケーションは苦手。
【表出】話す内容にまとまりが無く要領を得ない(攻撃性)、周囲の状況に気がかず一方的に話し続ける、ミスを指摘されると攻撃的になる。
【理解】伝達事項を聞き漏らす、内容が混乱・変容する、内容に独自の解釈を加える。
このような問題を入院中にチェックすることで、その方に必要なリハビリを提供したり、能力に合った対処方法を考えたりしながら、ご本人と共にリハビリを進めていきます。

4 フィードバックと自己認識

- Deep検査結果フィードバック
- 高次脳症状の仕事への影響についての理解度確認
- 本人の高次脳に対する理解度確認
- 家族の高次脳に対する理解度確認
- 二次障害の説明



ポイント
自身の症状を知ることが対策への近道

自身の症状を知ることが対策への近道



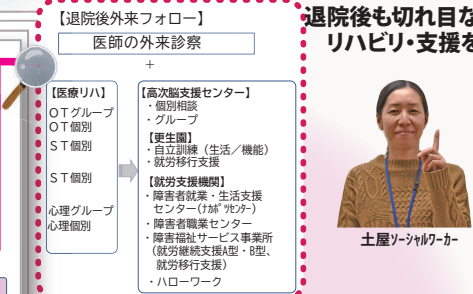
三宅心療師

リハビリによって障害自体の改善を目指すだけでなく、苦手な部分を補うための対策(代償手段)も大切です。この代償手段をうまく使いこなすためには、まずは現在の症状について知り、どんな対策が必要なのかを考えることが第一となります。しかし、高次脳機能障害は目に見えにくい障害であり、ご自身の症状になかなか気づきにくい場合も多いです。検査結果や入院生活の中で生じている課題について、面談や訓練の中で丁寧にフィードバックすることで症状への気づきを促し、代償手段の活用や、目標に向かうためのステップについて一緒に考えます。

支援項目は『入院時から退院後』の流れで進む

ICF	本人及び周囲に関するアセスメント	高次脳機能障害に対するアプローチ	退院後の決定	退院後
個人	本人 【本人に関するアセスメント】 【本人の強み、弱み、生活リズム】 【本人の生活リズム、生活リズム】 【本人の生活リズム、生活リズム】	【本人に関するアセスメント】 【本人の強み、弱み、生活リズム】 【本人の生活リズム、生活リズム】 【本人の生活リズム、生活リズム】	【本人に関するアセスメント】 【本人の強み、弱み、生活リズム】 【本人の生活リズム、生活リズム】 【本人の生活リズム、生活リズム】	【本人に関するアセスメント】 【本人の強み、弱み、生活リズム】 【本人の生活リズム、生活リズム】 【本人の生活リズム、生活リズム】
環境	家族 【家族に関するアセスメント】 【家族の強み、弱み、生活リズム】 【家族の生活リズム、生活リズム】 【家族の生活リズム、生活リズム】	【家族に関するアセスメント】 【家族の強み、弱み、生活リズム】 【家族の生活リズム、生活リズム】 【家族の生活リズム、生活リズム】	【家族に関するアセスメント】 【家族の強み、弱み、生活リズム】 【家族の生活リズム、生活リズム】 【家族の生活リズム、生活リズム】	【家族に関するアセスメント】 【家族の強み、弱み、生活リズム】 【家族の生活リズム、生活リズム】 【家族の生活リズム、生活リズム】
心身機能・身体構造	病識 【病識に関するアセスメント】 【病識の強み、弱み、生活リズム】 【病識の生活リズム、生活リズム】 【病識の生活リズム、生活リズム】	【病識に関するアセスメント】 【病識の強み、弱み、生活リズム】 【病識の生活リズム、生活リズム】 【病識の生活リズム、生活リズム】	【病識に関するアセスメント】 【病識の強み、弱み、生活リズム】 【病識の生活リズム、生活リズム】 【病識の生活リズム、生活リズム】	【病識に関するアセスメント】 【病識の強み、弱み、生活リズム】 【病識の生活リズム、生活リズム】 【病識の生活リズム、生活リズム】
生活活動(参加)	生活リズム・スケジュール 【生活リズムに関するアセスメント】 【生活リズムの強み、弱み、生活リズム】 【生活リズムの生活リズム、生活リズム】 【生活リズムの生活リズム、生活リズム】	【生活リズムに関するアセスメント】 【生活リズムの強み、弱み、生活リズム】 【生活リズムの生活リズム、生活リズム】 【生活リズムの生活リズム、生活リズム】	【生活リズムに関するアセスメント】 【生活リズムの強み、弱み、生活リズム】 【生活リズムの生活リズム、生活リズム】 【生活リズムの生活リズム、生活リズム】	【生活リズムに関するアセスメント】 【生活リズムの強み、弱み、生活リズム】 【生活リズムの生活リズム、生活リズム】 【生活リズムの生活リズム、生活リズム】
対人技能	コミュニケーション 【コミュニケーションに関するアセスメント】 【コミュニケーションの強み、弱み、生活リズム】 【コミュニケーションの生活リズム、生活リズム】 【コミュニケーションの生活リズム、生活リズム】	【コミュニケーションに関するアセスメント】 【コミュニケーションの強み、弱み、生活リズム】 【コミュニケーションの生活リズム、生活リズム】 【コミュニケーションの生活リズム、生活リズム】	【コミュニケーションに関するアセスメント】 【コミュニケーションの強み、弱み、生活リズム】 【コミュニケーションの生活リズム、生活リズム】 【コミュニケーションの生活リズム、生活リズム】	【コミュニケーションに関するアセスメント】 【コミュニケーションの強み、弱み、生活リズム】 【コミュニケーションの生活リズム、生活リズム】 【コミュニケーションの生活リズム、生活リズム】
身だしなみ	移動・外出 【移動に関するアセスメント】 【移動の強み、弱み、生活リズム】 【移動の生活リズム、生活リズム】 【移動の生活リズム、生活リズム】	【移動に関するアセスメント】 【移動の強み、弱み、生活リズム】 【移動の生活リズム、生活リズム】 【移動の生活リズム、生活リズム】	【移動に関するアセスメント】 【移動の強み、弱み、生活リズム】 【移動の生活リズム、生活リズム】 【移動の生活リズム、生活リズム】	【移動に関するアセスメント】 【移動の強み、弱み、生活リズム】 【移動の生活リズム、生活リズム】 【移動の生活リズム、生活リズム】

5 退院後



入院という限られた環境から、退院をして複雑な社会生活に戻ると、本人は生活のしにくさに直直し、高次脳機能障害に対する認識が変化することが多くあります。退院後も外来フォローをしながら、その方の状況に合わせて医療リハ、社会リハ、職業リハを行うことで、新規就労や復職、その後の就労定着に繋がります。退院後本人や家族が困った時に「どこに相談をしたらよいか分からない」とならないよう、外来リハの継続、もしくは適切な支援機関に引き継ぐといった切れ目のない支援が大切です。



▲医師・看護師・PT・OT・ST・心理師・ソーシャルワーカーからなるプロジェクトメンバー

3 グループ訓練

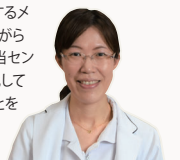
ポイント
自分の症状を知る・周りに合わせる

知的気づきに対するアプローチを目的に、PT、OT、ST、心理それぞれでグループ訓練を行っています。グループの内容は以下の通りです。PTではポチャなど体を使いながら、コミュニケーションが取りやすい課題を実施しています。OTでは「ワークサンプル」薄紙版、数値チェックやプリント課題を使用し、注意機能の回復・維持訓練やふりかえりを行っています。STでは意見交換やゲームを用いて、実用的コミュニケーション訓練を実施しています。心理では高次脳機能障害についての一般的な症状についての解説と認知課題を通した高次脳機能の働きの体験をし、対処法について参加メンバーで話し合っています。



おわりに

今回作成した視覚化シートは、患者さん各々の個人・環境因子などをふまえて、段階ごとの支援が行えるように工夫されています。このシートを活用することによって、支援者は、患者さんに対して必要な関わりを適切なタイミングで検討・提供し、それを支援者間で共有することができます。また、支援者の経験値による影響を少なくするメリットもあります。今後は、シートを活用しながら内容を見直すとともに、スタッフへの教育、当センターの高次脳支援の紹介、さらには、簡易化して患者さんへの説明資料としても使用することを検討したいと考えています。



赤萩医師